

~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

## 東南アジア史学会

——最近の活動の紹介を中心に——

きた がわ たか こ  
北 川 香 子

はじめに

- I 東南アジア史学会の設立
- II 学会活動
- III 情報化時代に対応して  
おわりに

はじめに

東南アジア史学会の目的は、「東南アジア史研究の発展および普及を図ること」(会則第2条)であり、そのために、次のような事業を行っている(会則第3条)。

1. 機関誌の発行
2. 研究および研究発表のための会合の開催
3. 会員総会の開催
4. その他の必要な事業

本稿では、まず東南アジア史学会の創立に至った経緯を述べ、学会が行っている事業のうち、最も重要なものである(1)学会誌『東南アジア——歴史と文化——』、(2)研究大会、(3)地区例会の3つを取り上げて、活動状況を紹介していきたい。

本稿の執筆にあたって、東南アジア史学会の舛谷鋭総務委員より、過去の『東南アジア史学会会報』を提供していただいたことを感謝する。しかしながら、本稿に書かれていることは、すべて一学会員としての私の個人的な見解であり、私個人の責任に関わるものである。また、35年

近い東南アジア史学会の歴史の中で、私が実際に会員の末席に連なっているのは最近の10年間のみであり、日本の東南アジア研究そのものと歩みをともにしてきた学会の紹介者としては、はなはだ心許ない。誤りについては、諸先輩方のご指摘を願うばかりである。

### I 東南アジア史学会の設立

東南アジア史学会は、東南アジアの歴史と文化に関心を持つ研究者を中心として、1966年11月に創設された。『東南アジア史学会会報』No.1(1966年12月12日)に掲載された、初代会長山本達郎の「東南アジア史学会の発足に当たって」という文章には、学会創設に至った経緯が以下のように記されている。

東南アジアの文化・歴史に関する研究者が集まって、ここに東南アジア史学会が発足することになりましたことを皆様と共に心から御喜び申し上げます。東南アジアの研究は日本の学界における新興の分野であり、いわば「後進地帯」でありましたが、最近では次第に研究者の数が増え、昨年以來三回にわたって研究集会を開きましたところ、各地方から多数の方がお集りになって研究発表と討論が活発に行われますと共に、全国的に研究者の組織を整えたいという要望

## ~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

が次々に出されましたので、東京在住の関係者の間で準備の話あいが進められて、本日発起人会が開かれ、次いで学会設立の総会が持たれることになったのであります。顧みますと、東南アジア史の研究会が定期的に開かれるようになったのは昭和17年の頃からでした。會では台北帝国大学をはじめとして各種の研究機関や団体が東南アジア研究に活発な動きをしていましたが、太平洋戦争の終結ののちに解体してしまいましたので、昭和17年以来、名称に変化はありながらも、現在まで24年にわたって続いてきた東南アジア史研究会が、今回の学会設立の御世話をすることになった次第であります。

ここに「東南アジアの研究は日本の学界における新興の分野」とあるが、学会創設に先立つ1957年には東京大学文学部に南方史講座が設けられ、63年には京都大学に東南アジア研究センターが設立された。東南アジア史学会は、戦後の日本における東南アジア研究と歩みをともにしてきたといってよい。

「東南アジア史学会」という学会の名称制定については、同じく「東南アジア史学会の発足に当たって」に、次のように記されている。

東南アジア史学会の名称については発起人会で種々検討をいたしました。こゝで史というのは最も広い意味で用いてありますので、歴史学的研究のみでなく、歴史的に形成された文化・社会・経済・政治等の諸領域を広く研究の対象とするものであります。東南アジアの史的研究には学問の諸分野の協力が特に重要であり、この協力関係の推進は旧来の歴史学に対して方法論上

の変革を求めることにもなるものと思われ  
ます。

この文章において、「文化・社会・経済・政治等の諸領域を広く研究の対象とする」とある通り、学会発起人34名の専門分野は、3分の2が歴史学であるが、地理学、言語学、民族心理学、インド哲学、社会学、政治学という広い分野にわたっていた<sup>(注1)</sup>。1975年頃からは、人文・社会科学だけではなく、自然科学の諸分野を専門とする会員も多数参加するようになった<sup>(注2)</sup>。会員数は、1967年3月の段階で52名であったのが、89年11月で316名、2000年12月現在の会員数は592名となっている<sup>(注3)</sup>。

## II 学会活動

## 1. 学会誌『東南アジア——歴史と文化——』

東南アジア史学会の学会誌である『東南アジア——歴史と文化——』は、1971年に創刊され、2001年6月で第30号を数えた。

第1号では、松本信広会員による「創刊の辞」、山本達郎会員による「東南アジア史研究の課題」に続いて、4本の論文、2本の研究ノート、4本の書評・紹介、最後に「モンスーン・学会消息」という、海外および国内の研究状況等に関する情報が付されるという構成になっている。1976年に刊行された第6号より、巻末に、その前年に日本国内で出版された東南アジア関係の文献目録が付され、東南アジアに関心を持つ学生・研究者の便宜に供されるようになった。1991年の第20号からは、書評論文と「研究最前線」というジャンルが付加された。1992年の第21号、94年の第23号では、「コレクション紹介」という企画がなされ、大学・研究機関に所蔵さ

## 学 界 展 望

表1 研究大会一覧(第20回以降)

|                    | 開催日                    | 会場                  | シンポジウムのテーマ                                                          |
|--------------------|------------------------|---------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 第20回               | 1978年12月 2, 3日         | 天理大学                | 植民地支配と東南アジアの経済的社会的変容(19世紀を中心にして)                                    |
| 第21回               | 1979年 6月17日            | 学士会館本郷分館            | 東南アジア先史文化の流れ<br>民族国家形成期の東南アジアとその植民地化                                |
| 第22回               | 1979年12月 8, 9日         | 京都大学                |                                                                     |
| 第23回               | 1980年 6月 7日            | 神田学士会館              | 東南アジア史におけるピルマ<br>植民地支配と東南アジアの政治的・思想的変容(20世紀前半を中心として)<br>東南アジアの歴史と文学 |
| 第24回               | 1980年10月18,19日         | 鹿児島大学               |                                                                     |
| 第25回               | 1981年 6月 6, 7日         | 御車会館, 京大会館          |                                                                     |
| 第26回               | 1981年12月12,13日         | 学士会館本郷分館,<br>神田学士会館 | 東南アジアの民衆運動<br>20世紀東南アジアにおける官僚制の変容と展開                                |
| 第27回               | 1982年 6月 5, 6日         | 慶應義塾大学              |                                                                     |
| 第28回               | 1982年12月11,12日         | 愛知大学                |                                                                     |
| 第29回               | 1983年 6月 4, 5日         | 京都会館会議場             | 東南アジア史研究と史料<br>東南アジア現代史におけるリーダーシップ                                  |
| 第30回               | 1983年12月 3, 4日         | 東京大学                |                                                                     |
| 第31回               | 1984年 6月 9,10日         | 大阪外国語大学             | 東南アジア華人に関する諸問題<br>東南アジアにおける輸出向け農業の展開と民衆                             |
| 第32回               | 1984年12月 8, 9日         | 上智大学                |                                                                     |
| 第33回               | 1985年 6月15,16日         | 広島大学                | 東南アジアにおける神話<br>東南アジア研究の現状と展望                                        |
| 第34回               | 1985年12月 7, 8日         | 創価大学                |                                                                     |
| 第35回               | 1986年 5月31日,<br>6月 1日  | 天理大学                | 「地域研究」の成果と展望<br>日本における東南アジア史研究の総括と課題                                |
| 第36回               | 1986年12月 6, 7日         | 東京外国語大学             |                                                                     |
| 第37回               | 1987年 6月 6, 7日         | 京都大学                | 東南アジア史の中の雲南<br>東南アジアの宗教と政治<br>第二次世界大戦と東南アジア                         |
| 第38回               | 1987年12月 5, 6日         | 慶應義塾大学              |                                                                     |
| 第39回               | 1988年 6月 4, 5日         | 南山大学                | 東南アジアにおける近代文学の成立をめぐる                                                |
| 第40回               | 1988年12月 3, 4日         | 大東文化大学              |                                                                     |
| 第41回               | 1989年 6月 3, 4日         | 神戸大学                | 東南アジアにおける共通語の成立と展開<br>東南アジア史のなかのマラッカ海峡                              |
| 第42回               | 1989年12月 2, 3日         | 早稲田大学               |                                                                     |
| 第43回               | 1990年 6月 2, 3日         | 摂南大学                | 植民地期東南アジア経済と企業活動・企業法<br>東南アジア史の中のベトナム<br>東南アジア研究の新しい展開              |
| 第44回               | 1990年12月 1, 2日         | 東京女子大学              |                                                                     |
| 第45回               | 1991年 6月 1, 2日         | 東京大学                | 東南アジア史のなかのフィリピン<br>東南アジアにおける宗教と国民統合                                 |
| 第46回 <sup>1)</sup> | 1991年11月30日,<br>12月 1日 | 南山大学                |                                                                     |
| 第47回               | 1992年 6月12,13日         | 東京大学                | 東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開<br>東南アジア史における先住民と移住民                         |
| 第48回               | 1992年12月 5, 6日         | 千里ライフ・サイエンスセンター     |                                                                     |
| 第49回               | 1993年 6月 5, 6日         | 北海道大学               |                                                                     |
| 第50回 <sup>2)</sup> | 1993年12月 3~5日          | 静岡県立大学              |                                                                     |

---

 学界展望
 

---

|                    |                 |              |                                   |
|--------------------|-----------------|--------------|-----------------------------------|
| 第51回               | 1994年 6月 4, 5日  | 東京大学         | 東南アジアにおける地域秩序の変遷                  |
| 第52回               | 1994年12月 3, 4日  | 大阪市立大学       | 大陸東南アジア諸地域の「時代区分」                 |
| 第53回               | 1995年 6月 3, 4日  | 名古屋大学        | 戦後東南アジア世界形成の礎——1930年代～1950年代の歴史再考 |
| 第54回               | 1995年12月 2, 3日  | 沖縄県立芸術大学     | 海のエンポリウム沖縄——東・南シナ海の接点で            |
| 第55回 <sup>3)</sup> | 1996年 6月 1, 2日  | 早稲田大学        | 東南アジア現地資料研究の進展                    |
| 第56回               | 1996年12月 7, 8日  | 鹿児島県歴史資料センター | 海に住む人々——海民, 海賊, 海商                |
| 第57回               | 1997年 6月 7, 8日  | 上智大学         | 東南アジア史の中のタイ                       |
| 第58回               | 1997年11月29, 30日 | 大阪大学         | 東南アジアの社会変容と女性たち                   |
| 第59回               | 1998年 6月 6, 7日  | 慶応義塾大学       | 東南アジアにおける軍                        |
| 第60回               | 1998年11月28, 29日 | 桃山学院大学       | エスニシティの誕生とその歴史化をめぐる               |
| 第61回               | 1999年 6月 5, 6日  | 東京大学         | 東南アジア前近代国家と支配空間                   |
| 第62回               | 1999年12月 4, 5日  | 愛知大学         | 「センサス」を「読む」——植民地国家と統治の文法          |
| 第63回               | 2000年 6月 3, 4日  | 立教大学         | 通史を考える                            |
| 第64回               | 2000年12月 2, 3日  | 広島大学         | 東南アジア史学の方法としてのオーラル・ヒストリー          |
| 第65回               | 2001年 6月 2, 3日  | 東京女子大学       | ナショナル・ヒストリーにどう向き合うか               |

- (注) 1) 創立25周年記念公開講演会として、石井米雄会員による「商人国家としてのアユタヤ」、後藤乾一会員による「東南アジア史の中の日本」が行われた。  
 2) 山本達郎会員による第50回大会記念特別講演、「歴史として見る東南アジアと日本」が行われた。  
 3) 第55回研究大会では、学会創立30周年記念特別講演会として、山本達郎会員による「東南アジア史像をどのようにして描くか」と題した講演が行われた。この講演は、学会誌『東南アジア——歴史と文化——』第26号(1997年6月)に採録されている。

れている文献コレクションが紹介された。

『東南アジア——歴史と文化——』に寄稿するための執筆要領は、雑誌末尾に付されているので、参照されたい。

## 2. 研究大会

東南アジア史学会では、年に2回、6月と12月に、研究大会を開催している。研究大会の1日目は自由研究発表に、2日目はシンポジウムにあてられている。研究大会は、2001年6月で、65回を数えた。表1は、第20回研究大会以降の会場およびシンポジウムで取り上げられたテーマである。

東南アジア史学会発足当初は、研究大会は主に東京で開催されていた。1976年に、当時の学

会長和田久徳が、「関西で研究大会を開いてはどうか」という旨の提案を行い、同年6月に京都大会が実現した。それ以降、年2回の研究大会のうち、少なくとも1回は東京以外で開催されるという慣行ができあがった。大会開催地が全国に広がることによって、学会の会員数も増大してきた。

また、1976年の京都大会より、大会の1日を自由研究発表に、もう1日をシンポジウムにあてるという前例が開かれ、現在では、シンポジウムの組織が、大会委員の重要な仕事のひとつになっている。京都大会におけるシンポジウムのテーマは、「東南アジア稲作民族の歴史と自然環境」であり、農業生態学者の福井捷朗会員が

### ~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

基調報告を行った<sup>(注4)</sup>。このように、東南アジア史学会の研究大会におけるシンポジウムのテーマには、狭い意味での歴史学だけではなく、広く東南アジア研究全体に関わるテーマが設定されてきている。

同様に、研究大会で報告される自由研究発表のテーマも、広い分野に渡っている。表2は、2000年12月の第64回研究大会における自由研究発表のテーマおよび発表者である。

東南アジア史学会の研究大会では、大学院生を中心とする若手研究者も、盛んに研究発表を行っている。若手による研究発表を旅費の面から援助することを目的として、会員から寄付を募り、研究助成基金が設けられ、1992年春季大会より助成が開始されている<sup>(注5)</sup>。

### 3. 地区例会

研究大会とは別に、関東地区、中部地区、関西地区、中国・四国地区、九州・沖縄地区にお

表2 第64回研究大会自由研究発表テーマ

| テ ー マ                                    | 発表者  |
|------------------------------------------|------|
| 1 植民地期ジャワの地方行政政策とバンテン村落                  | 藤田英里 |
| 2 阮(グエン)朝ベトナムとキリスト教弾圧——嘉隆(ザロン)・明命(ミンマン)期 | 牧野元紀 |
| 3 初期アンボン同盟とアンボン地域情勢について——1923年を中心に       | 河野佳春 |
| 4 なぜ大卒なのか——タイ1997年憲法制定過程                 | 玉田芳史 |
| 5 華僑・華人・華裔研究調査の新階段——華僑の島・金門本調査にむけて       | 市川信愛 |
| 6 東北タイにおける天水田の発祥                         | 福井捷朗 |

表3 関東地区例会での報告(2000年4月以降)

| 開催日        | 報告者          | テ ー マ                                                                                 |
|------------|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 2000年4月22日 | 高橋宏明         | 1920~30年代初頭のカンボジアにおける教育制度と海外留学——リセ・シャッスル・ローバ留学生の事例を中心に                                |
| 5月27日      | 坪井祐司         | 英領マラヤにおける人口把握手段の変化を通じた統治体制の変遷                                                         |
|            | 小川有子<br>牧野元紀 | 北ベトナムにおける「伝統」復興に関する一考察<br>阮(グエン)朝ベトナムとキリスト教弾圧について——嘉隆(ザロン)・明命(ミンマン)期(1802~1840)を中心として |
| 6月24日      | 千葉芳広         | アメリカ統治下フィリピンにおける華人移民政策の形成——植民地開発と人種主義                                                 |
| 9月30日      | 宮脇聡史         | フィリピン・カトリック司教協議会の政治関与——システムと言説                                                        |
| 10月28日     | 山本伸一         | インドネシアの国民統合と権力エリートによる『国民文化』の支配——スハルト政権下の文化状況について                                      |
| 11月18日     | 泉 経武         | 開発の時代の仏教政策——タイ東北地方における開発僧の事例研究                                                        |
| 12月23日     | 浅野静二         | 16世紀後半のビルマにおけるタウングー朝とセントゥンの交渉                                                         |
| 2001年1月27日 | 川本邦衛         | ベトナム語のlexicography 古辞書の体裁、字喃その他                                                       |
| 4月28日      | 矢野順子         | 第二次世界大戦以降のラオスにおける正書法問題について——王国政府とパテト・ラオの見解を中心に                                        |

## ~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

いて、地区例会が開かれている。

上記の地区例会の中で、最も長い歴史を持つのは関西例会で、2001年6月23日には、「いま、なぜ関西例会か——東南アジア史研究の未来像を求めて——」と題した25周年記念座談会を、大阪市立大学文化交流センターにおいて開催した。石井米雄会員の「『関西例会』のことなど」には、

最初の寄り合いで合意されたのは、会合は毎月定期的に開くこと…この会合は研究発表の場というよりもむしろ話題提供の場とし、新知識の提供よりも未完成の議論を

材料として討論を行うことを目的とし、そのため討論には十分な時間をわりあてるようにすることなどであった。会を重ねて行くうちに「話題提供」におおよそ1時間ないし1時間半、そのあとの議論に1時間半ないし2時間をあてるという現在の慣行が自然と確立するようになった。

とある。関西例会で確立したこのようなスタイルは、他の地区例会でも踏襲されているようである。年に2回の研究大会では、発表および質疑応答の時間が制限されているため、例会後の懇親会を含めれば、事実上時間制限のない地区

表4 中部地区例会での報告(2000年4月以降)

| 開催日                  | 報告者                      | テ ー マ                                                             |
|----------------------|--------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 2000年4月8日            | 竹野富之<br>坪井祐司             | イスラム・リーダー・イマム(imam)について<br>英領マラヤにおける人口把握手段の変化を通じた統治体制の変遷          |
| 5月13日                | 輻井秀介                     | 近代雲南の一大交易品・アヘン——その生産、流通、少数民族の関わりについて                              |
| 6月10日                | 牧野元紀                     | 阮(グエン)朝ベトナムとキリスト教弾圧について——嘉隆(ザーロン)・明命(ミンマン)期(1892~1840)を中心として      |
| 6月24日                | 加藤久美子                    | タイ政治権力の交易への関与——1950年前後のシブソーンパンナーの事例                               |
| 7月1日                 | Attachak<br>Sattayanurak | Japanization and Thailand                                         |
| 9月9日 <sup>1)</sup>   | 大形里美<br>服部美奈             | 歴史の中の「改革派」——テリアル・ヌールのムハマディア研究<br>インドネシアにおけるイスラーム改革運動と女子教育——現状を中心に |
| 10月14日 <sup>2)</sup> | 林謙一郎<br>清水 洋             | 東南アジア前近代史を「斬る」<br>からゆきさんと日本の対東南アジア経済進出——シンガポールを中心として              |
|                      | 大橋厚子                     | 開発と歴史学                                                            |
| 11月11日               | 宮部真理子                    | シャム危機における英国の利益                                                    |
| 12月16日               | Prof.A.Mani              | シンガポールの南アジア系移民コミュニティ                                              |
| 2001年1月27日           | 太田 淳                     | 1750~52年のバンテン危機——バンテン社会史における位置づけ                                  |
| 4月14日                | 小林寧子                     | アブドゥルラフマン・ワヒドの思想形成の軌跡——イスラームのプリブミ化への模索                            |

(注) 1) イスラーム研究プロジェクト2A との共催研究会。  
2) 150回記念シンポジウム「東南アジア研究入門」。

~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

表5 関西地区例会での報告(2000年4月以降)

| 開催日 | 報告者 | テ ー マ |
|------------|------------------------|--|
| 2000年4月15日 | 田村克巳 | 火の王・水の王・風の王——ヴェトナム中部高原民族誌断片 |
| 5月27日 | 澤井なつみ | タイ語『三界経』(Traiphumi Phraruang)に見られる「悪業」(bapkam)と「積善」(thambun)の意味構造 |
| 6月17日 | 宮原 暁 | 「商理」と「拜拜」——商業を語る言語(セブ華僑・華人社会の調査から) |
| 7月15日 | 桃木至朗, 林謙一郎, 渡辺佳成, 松尾信之 | 『新版世界各国史5 東南アジア史I 大陸部』(山川出版社)合評会 |
| 9月16日 | 林 行夫 | 実践仏教文化史の試み——東南アジア大陸部・西南中国における地域間比較から |
| 10月21日 | 河野佳春 | 初期アンボン同盟とアンボン地域情勢について——1923年を中心に |
| 11月18日 | 鈴木恒之, 深見純生, 早瀬晋三 | 東南アジア島嶼部の歴史はムラユで括れるか?——池端雪浦編『新版世界各国史II 東南アジア史 島嶼部』(山川出版社1999年)の執筆を踏まえて |
| 12月16日 | 清水政明 | ベトナム語ハノイ方言の声調体系について——通時的考察の試み |
| 2001年1月20日 | 北川香子 | チャン・リエチエ王治世に関するカンボジア年代記の記述—ヴィツカリー批判 |
| 2月17日 | 加藤 剛 | 視覚の悦び——図像資料のすすめ |
| 3月17日 | 松尾信之 | ベトナム北部1農村における人の移動 |
| 4月21日 | 山田みちる | 植民地下フィリピンにおける地域農業構造の特質——1903年と1918年のセンサスの分析を中心に |

例会で報告をした後に、研究大会での発表に臨む例が、特に大学院生をはじめとする若手研究者の間で多く見られる。地区例会は、若手研究者の育成という面で、大きな役割を果たしている。

それだけではなく、それぞれの地区の実状に合わせて、各地区委員が創意工夫を凝らし、特色ある活動を展開している。2000年4月～2001年4月までの、各地区例会の活動状況は、以下の通りである(注6)。

(1) 関東地区(表3参照)

関東地区例会は、上智大学四谷キャンパスを会場とし、原則として、毎月最終土曜日に開催されている。参加者は平均20名程度である。

(2) 中部地区(表4参照)

中部地区例会は、南山大学外国語学部を会場として、第2土曜日を原則に開催されている。2000年10月に150回を迎え、記念シンポジウムを開催した。

(3) 関西地区(表5参照)

関西例会は、土曜日に、大阪駅前第3ビル16階大阪市立大学文化交流センターを会場として活動している。

また、関西例会では、1999年11月より、科学研究費「東南アジア史研究で卒論・修論を書くための教育・研究工具の開発のための研究」の研究會活動を、例会活動と合同で開催している(表6参照)。

~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

**表6** 「東南アジア史研究で卒論・修論を書くための教育・研究工具の開発のための研究」活動(2000年4月以降)

| 開催日        | 報告者                    | テ ー マ                                                                  |
|------------|------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 2000年4月15日 | 石澤良昭                   | カンボジア史研究の現状と課題——アンコール遺跡の調査研究・保存修復とカンボジア現地に学ぶ姿勢                         |
| 5月27日      | 石井米雄                   | タイ近世史研究の方法について                                                         |
| 6月17日      | 永野善子                   | フィリピン革命百年と「ポスト・コロニアル」——アメリカ植民地期研究とフィリピン革命史研究の接点を求めて                    |
| 7月15日      | 桃木至朗, 林謙一郎, 渡辺佳成, 松尾信之 | 『新版世界各国史5 東南アジア史I 大陸部』(山川出版社)合評会                                       |
| 9月16日      | 植村泰夫                   | インドネシア史で卒論・修論を書くために                                                    |
| 10月21日     | 後藤乾一                   | 日本占領期研究・歴史認識・歴史運動——インドネシアの事例を中心に                                       |
| 11月18日     | 鈴木恒之, 深見純生, 早瀬晋三       | 東南アジア島嶼部の歴史はムラユで括れるか?——池端雪浦編『新版世界各国史II 東南アジア史 島嶼部』(山川出版社1999年)の執筆を踏まえて |
| 12月16日     | 八尾隆生                   | 史料の魅力, 史料の呪縛——ベトナム史で卒論・修論を書く人の喜びと覚悟                                    |
| 2001年1月20日 | 林謙一郎, 加藤久美子            | 卒論・修論で雲南の歴史を取り上げるために                                                   |
| 2月17日      | 速水洋子                   | 歴史の語りの生成とその前夜——19世紀ビルマ・カレンにおける儀礼, 民族, キリスト教                            |
| 3月17日      | 早瀬晋三                   | ナショナル・ヒストリーを越えること…——フィリピンの事例                                           |
| 4月21日      | 梅原弘光                   | 地域と歴史——ミンダナオ島の一地名考察から                                                  |

## (4) 中国・四国地区

参加者は20名前後である(表7参照)。

## (5) 九州・沖縄地区(表8参照)

### III 情報化時代に対応して

1996年春季大会において, 東南アジア史学会としても, より積極的にインターネットに取り組むことが提案された(注7)。この取り組みの一環として, メーリングリスト「SEAML」が1996年12月より運用され始めた。「SEAML」は, 東南アジア史学会会員ならば誰でも自由に参加で

きることを原則とし, いつでも加入, 脱退, 再加入できる。このメーリングリストでは,

(1)学会事務局から会員へのお知らせ

(2)各地区における研究例会のお知らせ

(3)東南アジアに関連する会合や行事についてのお知らせ

(4)東南アジアに関する有益な情報, 研究調査に関連する疑問, 学会活動に関する意見などの会員同士の交換

を主な目的としている。地区例会における報告要旨や, 研究大会のプログラム, 発表およびシンポジウムの要旨なども, このメーリングリス



~~~~~ 学 界 展 望 ~~~~~

表7 中国・四国地区例会での報告 (2000年4月以降)

| 開催日 | 会 場 | 報告者 | テ ー マ |
|------------|--------------|-----------------|---------------------------------------|
| 2000年4月29日 | 広島県立生涯教育センター | 山下明博 | 東北タイのラオ人の帰属意識の変容と国民統合政策とのかかわり |
| 5月27日 | 広島市婦人教育会館 | 祖田亮次 | マレーシア・サラワク先住民の都市—農村間人口流動 |
| 6月24日 | 広島市婦人教育会館 | 原田真理子 | あなたはカミをシンジルのですか——タイ東南部カトリック教徒の他信仰への対応 |
| 7月29日 | 広島市婦人教育会館 | 松崎 聡 | 仏領インドシナの米輸出に関する一考察 |
| 9月30日 | 広島市婦人教育会館 | 早瀬晋三 | アジア間貿易論をフィリピンからみる |
| 10月28日 | 広島市婦人教育会館 | 藤田英里 | 植民地期ジャワの地方行政政策とバンテン村落 |
| 11月25日 | 広島市青少年センター | 松田月子 | 1930年代アチェ北岸地域における植民地支配と住民農業 |
| 12月23日 | 広島県立生涯教育センター | 石川真帆 | 身体語彙に関する諺から見たインドネシアと日本の文化 |
| 2001年2月3日 | 広島市婦人教育会館 | ピヤダー・ショ
ンラオン | 15~16世紀における琉球とシャムの関係 |
| 3月31日 | 広島市婦人教育会館 | 藤田英里 | 植民地期ジャワの長老制度について |

表8 九州・沖縄地区例会での報告 (2000年7月以降)

| 開催日 | 会 場 | 報告者 | テ ー マ |
|-----------|----------|----------------------|---|
| 2000年7月1日 | 福岡学生交流会館 | 土井利幸 | アジア開発銀行に対する NGO の取り組み——グローバル化の中で |
| 9月23日 | 別府大学 | 横山豪志
黒田景子
平田利文 | インドネシア共和国革命とジャワ広告の運命：素描
18~19紀の南部タイ港市ネットワークの変遷について
タイの教育改革——1999年国家教育法をめぐって |

トを通じて配信されている。

1997年12月からは、学会のホームページが一般に公開された。学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jssah/> は、

- (1) 東南アジア史学会会員の情報の発信と受信の便宜をはかる
- (2) 海外の東南アジア研究者が、日本における東南アジア研究の状況を知り、日本の東南アジア研究者とコンタクトをとるための便

宜を図る

- (3) 東南アジアに興味関心を持つすべての人々に、東南アジアに関する情報の発信と受信の便宜をはかる

ことを基本的方針として作られており、現在における内容は、以下のとおりである。

- (1) 東南アジア史学会について
- (2) 研究大会の案内
- (3) 各地区研究会などの案内

 学 界 展 望

- (4)国際会議などの案内
- (5)奨学プログラムなどの案内
- (6)東南アジア史学会会報
- (7)学会誌『東南アジア——歴史と文化——』
- (8)東南アジア関連文献目録
- (9)東南アジア史学会メーリングリスト
「SEAML」案内
- (10)東南アジア関連リンク集

メーリングリストおよびホームページの開設によって、学会員は、学会が直接関係する研究会等はもとより、それ以外の東南アジアに関する情報をいち早く入手することが可能となり、会員相互の交流も、以前より密になってきている。

おわりに

学会創設の当初より、東南アジア史学会は「史」の意味を広く取り、開かれた学会たらんとしてきた。東南アジア史学会の「史」は、決して「過去のみを対象とし、現在を排除する」という意味に取られてはならない。また、時間軸を無視して、現在だけを取り出すことによって、何か

を理解するなどあり得ようか。私は、現在に至るまでの時間軸の中で、東南アジアという対象に総合的に向き合おうとする態度こそ、東南アジア史学会の目指すものであり、狭い意味での歴史学の範囲を超えて、学会員を集めてきた所以であると信ずる。

(注1) 山本達郎「東南アジア史学会創立25周年」(『東南アジア——歴史と文化——』第20号 1991年5月)。

(注2) 石井米雄「『関西例会』のことなど」(同上誌)。

(注3) 『東南アジア史学会会報』第2号 1967年3月；第52号 1990年5月；第74号 2001年5月。

(注4) 石井「『関西例会』のことなど」。

(注5) 『東南アジア史学会会報』第55号 1991年11月。

(注6) 『東南アジア史学会会報』第73号 2000年10月；第74号 2001年5月。

(注7) 『東南アジア史学会会報』第66号 1997年4月；第68号 1998年4月。

(国立民族博物館地域研究企画交流センター
非常勤研究員)